

巻 頭 言

本研究所令和3年度の紀要『言語と文化』第34号をお届けします。本号には研究論文3篇、研究ノート1篇、報告1篇を掲載しています。まずは、投稿して下さった方々、そしてご多忙の中貴重な時間をさいて査読に協力して下さった方々、併せて、頻繁で煩瑣な事務に当たられた研究所事務教員の方々に心より厚く御礼を申し上げます。

2021年は昨年と同様に新型コロナウイルスが猛威を振るった一年でありました。新型コロナウイルスは社会の活動に大いに支障をきたしたのみならず、教育活動や研究活動にも深刻なダメージを与え、本研究所も大きな影響を受けました。

30年以上続けてきた本研究所恒例の年間行事である夏期公開講座は、感染状況が若干改善したので、本年はオンラインに切り替えて開催することができましたが、計画していた国際共同研究では、海外からの研究者の招聘は昨年同様断念せざるを得ませんでした。

昨年当番校でありましたが、本年に延期された、文学部主催、言語文化研究科、当研究所協催の日中韓三国日本語文化に関する国際学術シンポジウムは、11月13日にオンラインで、本言語文化研究所が事務局を務めて開催されました。発表者、座長、司会として参加された多くの先生方のご協力と研究所事務職員の方々のバックアップにより成功裏に終えることができました。関係者の皆様に衷心より御礼申し上げます。

なお、恒例の研究所の行事である異文化体験講演会は、12月に、文学部外国語学科のグジョン・ジョナタン先生のご講演により開催され、研究例会は既に述べた、国際学術シンポジウムの中で、開催されました。

コロナ禍の中で、研究所の行事は従前どおりにはできせんでしたが、皆様のお助けを受けどうにか行うことができました。ここに改めて皆様に御礼申し上げます。

昨年秋以降、収まっておりましたコロナ感染も2022年に入り、オミクロン株により、一昨年にも、昨年にも比べようのないペースで、急激に拡大してまいりました。明けない夜がないように、一日も早くコロナ禍が終息することを願わずにはおられません。

皆様のご健勝を祈念いたしまして、巻頭言とさせていただきます。

壬寅立春
言語文化研究所
所長 阿川修三

